

厨房施設・煮沸具から見た隼人の特質

別府大学大学院 文学研究科文化財学専攻
博士前期課程 M1513003 江口寛基

7～10 における隼人は主に炉付きの竪穴住居を住处とし、それに対し支配者層は掘立柱建物に、さらには旧日向・肥後国の地域ではカマド付き竪穴住居が一般的な住处とされている。本稿では、これらの住居址から出土した煮沸具(甕・甑等)を比較対象とし、その編年が地域ごとにどう違ってくるのか、さらにはススやコゲの付き具合からその煮沸方法の違いまで検討していく。またオキビ転がしと呼ばれる、土器を横にして煮沸した弥生時代来の手法の存在も検討して研究内容に付加した。

旧日向国の地では、甕は 6C 後葉から 7C 初頭になると、カマドの導入により土器に長胴化がみられ、8C になると胴が張らずに真っ直ぐな器形となるものと寸動型へと変化していくものがそれぞれある。今回、埋甕炉(6～8C)から確認された土師器甕からは通常の煮沸による煮沸痕の付着が比較的多くみられ、カマドが附設された住居からはオキビ転がしの孫座は確認できた。宮崎県においてはカマドの導入は 6C からカマドの導入が始められる。オキビ転がしという煮沸方法は炊飯技法であるため、埋甕炉より煮沸された土師器甕は炊飯以外の用途(スープなどの料理)で使われたものであり、当の炊飯はカマド専門の使用へと転換していったものと考えられる。

旧肥後国では、カマドの初現が 5C に、甕には 6C 後に長胴化がみられ、9C には器高が低くなる傾向がある。当地域においてもオキビ転がしの存在は確認できたが、それ以外での成果は薄く、今回は竪穴式住居内出土の土器のみ扱ったため、その他の遺構から出土した土器の研究も追加する必要がある。

旧薩摩国の地では、日向国・肥後国と違い、脚台付きの成川式土器が 9C 後にまで確認できる。丸底の土師器甕は 8C 後からみられ、9C になると器高が低くなる。旧肥後国と関わりの深い非隼人郡が存在する。この地では当時旧肥後国から移民が行われており、カマド付き竪穴住居にはそれら移民が住んでいたとする。当地域ではカマド付き竪穴住居内出土ではないものの、それを有する遺跡内からは、旧肥後国と同様に、スス・コゲが胴中部以上にパッチ状・帯状に付着していることから移住後も炊飯作業に変わりはなかったものと考えられる。

一方の隼人郡(指宿市橋牟礼川遺跡・敷領遺跡)では、スス・コゲの付着から有力な研究成果が出せなかった。しかし、カマド付きの平地式住居が確認されており、本来カマドとセットとなる丸底甕に加え、そこでは成川式土器を使用していた痕跡が残されていた。炉付き竪穴住居に一般層(隼人)、掘立柱建物に支配層の者がそれぞれ住んでいたとすれば、カマド付きの平地式住居は、豪族レベルの隼人が存在していたと考える。